



# すだち

The Tokushima University Library Bulletin

徳島大学附属図書館報 No. 55 1996. 9

## 目 次

### 巻頭記事

- 泉山と泉山文庫 ..... 1  
 附属図書館の平成8年度事業計画 ..... 3

### お知らせ

- 常三島地区における  
 集中配置対象雑誌の調査 (本館) ..... 5

### トピックス

- 図書館ガイダンス (本館) ..... 5  
 ERL システム稼動試験 ..... 5  
 夏季休業期の  
 夜間開館時間延長試行 (分館) ..... 5

### 自然科学系特別図書

- Landolt Börnstein : Numerical data & functional relationships in science & technology (ランドルト=ベルンシュタイン数値表) ... 5  
 新入生にすすめる100冊の本 (本館) ..... 5

### 資料情報

- Audio Visual おすすめの一本 (本館)  
 ワグナーの楽劇『神々の黄昏』 ..... 6  
 Audio Visual 利用のすすめ (分館) ... 7  
 本学教官著作寄贈図書一覧 ..... 7

### 図書館日誌

- 会 議 ..... 8  
 人事往来 ..... 8

## 泉山と泉山文庫

総合科学部教授 丸山幸彦

当附属図書館に<sup>せんざん</sup>泉山文庫という文庫がある。この文庫は島田<sup>まさきち</sup>麻寿吉(号、泉山)の蔵書で構成されている。周知されているとは言い難いので、以下泉山と泉山文庫について簡単に紹介してみたい。

島田麻寿吉は1874年(明治7)に徳島県那賀郡長生村(現阿南市長生町)に生まれ、幼時漢学を学ぶとともに、1897年(明治30)上京し2年間二松学舎に学ぶ。帰郷後は地主として、加茂谷鉦山の採掘事業・柑橘園の経営などを行うとともに那賀郡郡会議員をも務め、第二次世界大戦後の1947年(昭和22)に没する。明治から昭和にかけて地元名士としての生涯を郷里で送った島田麻寿吉を注目すべき存在に

しているのが、彼が泉山の号のもとで行った阿波の古代・中世の地域史にかかわる研究活動であった。泉山の著述活動がはじまるのは彼が40歳代になってからの1910年代以後のことであり、早い出発ということではできない。しかし以後没するまで精力的にこの活動に取り組み、数々の業績を生み出していく。江戸時代の漢学者・儒学者などによる研究を別にし、明治維新以後の阿波の古代・中世の地域史研究はこの泉山の研究を先駆とし、今に至っているのである。

泉山の著書としては、1916年(大正5)発行の『八鉦神社と長国造』を始めとして1932年(昭和7)発

行の『徳島市郷土史論』に至るまで数冊ある。また雑誌論文も多数あり、それら論文・著書のなかで多角的に阿波の古代・中世の歴史を明らかにしていくのである。なかんずく『徳島市郷土史論』は彼の主著とされているものであり、内容は吉野川・勝浦川下流域地域についての、春日神社領富田庄の消長を軸にした研究書である。その研究は8世紀の東大寺領新島庄から、12～4世紀の富田庄、さらには室町・戦国期にまで及ぶものである。その分析方法はその時点までに公刊されていた東大寺文書・春日神社文書などに収められている関係文書・絵図を綿密に分析するとともに、丹念な現地調査を行いその裏付けをとっており、この地域の古代・中世の動向について始めて本格的なメスをいれたものである。このうち東大寺領新島庄については8世紀時点の日本最古の絵図の一つである新島庄絵図の現存（正倉院蔵）ということもあって、第二次世界大戦後の歴史学の急速な発達のなかで全国的に注目を集め多くの歴史および地理研究者による分析がなされてきた。泉山もこの庄に触れているが、全国的には無名ということもあってそれらの研究で参照されることはなかった。しかし第二次大戦後の研究者たちの分析の到達結果の中心的な部分については、泉山がすでに簡潔な形ではあるが、この著書で明確に述べているのである。論証過程についての十分な記述がないという点では現在からみるとやや不満は残るが、その分析力の高さは注目に値する。以上はその一つの例であるが、これ以外にも中世の吉野川や富田庄についての的確な分析など、この著書は刊行後60年を経過しているにもかかわらず、いまだにその生命力を保っている書物である。



以上が泉山の業績の概要であるが、彼がどのような背景のもとでこのような高レベルの学問を形成しかつ展開させていったのかについて考えてみたい。

まず、彼の著書が最初に刊行されたのは1916年である。この時期は大正デモクラシーの時期であり、全国的にいて明治初期以来西欧諸国に学びつつ積み上げてきた、人文・社会・自然科学という近代科学の諸分野での研究が豊かな成果を上げ始めた時期である。日本史の分野でいえば、近代日本史学の創始者の一人である津田左右吉(1873-1961)が古事記・日本書紀を対象とした一連の研究の最初のものとして『神代史の新しい研究』を出版したのが1913年(大正2)である。西欧で発達した実証主義史学の方法を自らのものとした上で、実証的・批判的に記・紀の分析を行い、近代的な日本古代史学研究の基礎を築いた津田もこの大正デモクラシーが生み出した存在であった。

ちなみに泉山文庫は江戸から昭和初期に至る間に刊行され流布していた比較的一般的な和刻本・洋装本がそのほとんどを占めるが、注意したいのは明治から大正期にかけて出版された日本史関係の書物さらに大日本古文書・大日本史料・国史大系など日本史関係公刊史料群など、明治期の近代的歴史学が生み出した成果が系統的に集められていることである。西欧関係の歴史書ないしその翻訳書は見あたらないが、泉山が徳島の地にあつて新しい知識の吸収を怠っていなかったことをしめすものであろう。泉山が壮年期になってしかも津田とほぼ同一時期にその著書を刊行しているのは偶然ではないのであり、若いときからの努力の成果が大正初期に実を結んだというべきである。その意味で泉山も大正デモクラシーの申し子という側面をもっているのである。

なお、泉山との関わりで津田とならぶ近代歴史学の創始者の一人である喜田貞吉(1871-1939)にも注目したい。喜田は勝浦郡榑淵村(現小松島市榑淵町)に生まれ徳島中学・第三高等学校をへて東京大学に学ぶ。明治の末、喜田が文部省の教科書編纂官をしていたときに、南北朝時代について実証史学の立場から南朝と北朝の並存を記述していたが、これにたいして一部政治家・軍人から南朝こそが「正」であり、北朝は反逆の徒が作った「閏」であるべきだとする、近代歴史学とは無縁な名分論的な立場からする教科書攻撃が加えられる。喜田は節をまげず結局辞職に追い込まれる。これが有名な南北朝正閏論争である。大正期に入って当時京都大学で教鞭をとっていた喜田は被差別部落の研究を始める。部落史についての日本で最初の本格的な科学的・実証的研究である。喜田の姿勢は実証を貫くこと、視野のなかに常に生きた民衆を入れながら社会正義の実現



をめざすことでは一貫していたといえる。とくに後者の姿勢が部落史の研究や京都大学を辞して後に東北大学に移るがそこで徹底した現地調査に基づく蝦夷の民俗学的な研究などに結実していくのである。

問題は喜田と泉山の関係である。泉山の学問内容を見た場合、古文書に基づく精密な実証、さらにそれに留まらぬ丹念な足で歩く実地調査の組み合わせが特色になっているところは、喜田史学の影響を考えさせずには置かない。泉山と喜田は3歳しか年が違わないこと、また喜田が終生故郷との交流を欠かしていないことなどからみて、何らかの関わりがあったとみてよいのではないか。ただ、両者の間の交流を示す史料は管見の限りでは『喜田貞吉著作集』の別巻に収められた回顧録のなかに、喜田の還暦記念会への拠金者芳名録が載っており、そこに島田麻寿吉の名が見えているということのみである。

以上、泉山の業績およびその学問形成の背景についてかいつまんでみてきた。しかし、未知の部分が多すぎる。それを埋める努力を我々後進がしていく必要があるのである。以下そのための課題を列挙して結びとする。

1. 泉山は数冊の著書以外に地方史研究の関係雑誌などに多くの論文を掲載しているが、管見の限りではまだ目録もできていない。公刊された著書・論文の網羅的な収集と検討は全体的な泉山像を見る上で、まず必要なことである。
2. 泉山文庫中には庄園史関係論文を含む未公開の

原稿が残されているが、これらも十分整理がされておらず、この整理も課題である。これについて、当附属図書館の館長をも務められた竹治貞夫徳島大学名誉教授が『平島公方の「阿波退去日記」その他』を本年（1996）になり公刊されたが、その編著のなかに泉山文庫中にある泉山筆録の「平島家西光寺過去帳其他」を収め注記を加えておられる。それによると西光寺（那賀川町赤池）では1942年（昭和17）に本堂とともに過去帳も焼失し今はないが、泉山が焼失前に抄録したものという。いかにも泉山の仕事らしく、現地を足で歩きながら正確に記録を取っているのが印象に残る。竹治氏の丹念な復元研究に深く敬意を払うとともに、我々もこのような未公開原稿の掘り起こし作業をしていかねばと痛感する。

3. 泉山文庫は一般的に流布している公刊本により構成されており、いわゆる稀覯本・貴重本の類はないといってよい。しかしこのことはこの文庫の価値を貶めるものではない。文庫を構成している本の一冊一冊が第二次世界大戦前において地方居住の民間知識人がどのようなものを道具にしてあるいは背景にして、地域史研究という未知の世界に挑戦していったのかを見ていく上で重要な鍵を与えてくれるはずである。その意味で津田史学や喜田史学などから何を受け継いでいるのかの調査研究を含めた泉山文庫そのものの調査・研究は今後の泉山研究の重要な一環をなすものと考えられる。

## 附属図書館の平成8年度事業計画

附属図書館事務部長 坂上光明

去る6月7日に開催された第1回附属図書館運営委員会において、平成8年度の附属図書館事業計画が承認されました。この事業計画は、先に刊行された本学附属図書館の自己点検・評価報告書（平成8年3月）の指摘や、最近の国立大学図書館の全国的な動向を踏まえて、本年度に当館が取り組むべき当面の課題を列挙したものです。この事業計画の達成に向けて、学内の関係者、図書館利用者のご理解を得るため、以下にその主要事項の内容と背景などについて簡単にご説明させていただきます。

### 1 自己点検・評価の推進

冒頭で触れたように、本学附属図書館における自己点検・評価の成果は、本年3月に刊行された報告書「大学図書館と学術情報サービスの発展をめざして」にとりまとめられています。そこでは、当館の現状と問題点を個別的に指摘するにとどまり、本学における図書館システムや学術情報システムのあ

るべき姿について全体的な構想を提示するところまでには至っていません。附属図書館の施設、組織、業務、サービスを含む全体的な将来計画をとりまとめ、これを大学全体の将来構想の中に適切に位置づけていくという作業が、今年度以降の重要な課題となっています。

## 2 学術雑誌共同利用の推進

本学、特に常三島地区では、学内で購入している学術雑誌のほとんどが教官研究室または学科の図書室等に分散しており、図書館で誰でも自由に利用できる学術雑誌がごくわずかしかありません。

このような現状に対して、学術雑誌へのアクセスの拡大を図るため、図書館への集中化もしくはこれに準ずる共同利用体制の整備を求める意見がこれまで機会あるごとに教官、大学院生、留学生等から寄せられてきました。

附属図書館常三島地区運営委員会でも、数年来この問題に取り組んできており、昨年度は地区内の全教官を対象にアンケート調査を実施したところ、回答者の約80%から共同利用の推進について賛成の回答を得ました。

今年度は、このアンケート調査の結果を踏まえて、共同利用の具体的な実施案を作成した上で、その実現に向けて第一歩を踏み出す必要があります。

図書館としても、集中化する場合の学術雑誌の配架場所、閲覧、貸出、コピー等のサービス体制などについて十分検討し、集中化が全体としてのサービス向上につながるよう努力する所存です。

学術雑誌の共同利用を実現するためには、特に教官各位のご理解とご協力が不可欠となります。改めてよろしくお願い申しあげる次第です。

## 3 夜間開館時間の延長

図書館では従来、夏期、冬期等の休業期間中及び土曜日を除いて、夜8時までの夜間開館を実施しているほか、平成6年度から試行的に学期末試験期間中は夜9時まで開館時間を延長していますが、利用者からは、さらに年間を通じて夜9時以降までの開館時間の延長を望む意見があり、特に蔵本分館では、夏期休業期間中の夜間開館の実施を求める要望が強

く出されています。

このため本年度から、蔵本分館では8月を除く夏期休業期間中についても、夜8時までの夜間開館を実施（一年間試行）することとしました。本館については、工学部夜間主コースの拡充を考慮し、授業期間中の開館時間延長の通年化を検討していきたいと考えています。

## 4 ネットワークによる電子情報サービスの展開

学内LAN及びインターネットの急速な普及に伴い、学術情報の流通のあり方が大きく変化しており、従来、図書、雑誌等の形態で流通していた多くの学術情報が、CD-ROMやインターネット上の情報資源として電子媒体で提供されるようになりました。

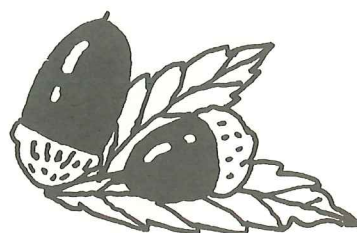
図書館でも、従来の図書、雑誌等の資料だけでなく、電子的な情報資源を積極的に導入し、学内LANやインターネットを通じて学内外に提供していく必要があります。

このような電子情報サービスとしては、既にMEDLINEとCurrent Contentsのネットワークサービスを提供していますが、今後、このようなサービスをさらに拡大し、研究室等からいつでも必要な情報を検索できる体制を整備していくためには、経費負担の方法を含めて、その実現方策について全学的な協議と合意が必要になると思われます。

また、既存の情報資源を外部から導入して提供するだけでなく、学内で発生する学術情報を電子化して、学内外に提供するサービスも、図書館が関係機関との緊密な連携のもとに積極的に展開していく必要があります。今後、附属図書館運営委員会において、提供すべき学術情報の内容やサービス体制のあり方などを検討していただき、実現に向けて努力していきたいと考えております。

以上のほか、利用者に対するガイダンスの充実や複写サービスの改善（コイン式またはカード式複写機の設置）についても、本年度の課題として積極的に取り組んで参ります。

利用者及び関係各位のご支援、ご協力を重ねてお願いする次第です。





## お知らせ

### 常三島地区における集中配置対象雑誌の調査（本館）

このたび、学術雑誌の共同利用推進の一環として、

平成9年1月より学術雑誌の図書館への集中配置を実施するため、対象雑誌の調査を行うことになりました。より多くの利用者が利用しやすくなるために、ご協力の程よろしく申し上げます。

## トピックス

### 図書館ガイダンス（本館）

本館では、昨年に引き続き、6月6、19、27日の3回の日程で図書館ガイダンスを実施しました。

今回のガイダンスは、昨年の総括（すだち53号掲載）をふまえ、全学年を対象とした希望者制の形をとり、内容も、図書等の検索方法を詳しく説明するなど、より目的のはっきりしたものに変更しました。しかし、周知期間が短かったためか、参加者はわずか2名にとどまりました。募集の方法がポスターのみであったことも一因と考えられます。

こういう状況では、ガイダンスの内容については是非を検討することもできません。図書館側からの情報発信の不足、宣伝不足という問題は、今回に限らず指摘されているところですが、来年度は早い時期から宣伝を行って、ガイダンスのより良い在り方について考えてみたいと思います。

### ERL システム稼動試験

MEDLINE（米国医学図書館協会作成の医学分野を中心とした生命科学データベース）のネットワークサービスで利用しているサーバマシンは、平成5年度に導入したパソコンで、当時としては高性能の部類に属していたものの、昨今のパソコン高性能化の状況下では、エントリー機のレベルにまで格下げされたようです。また採用しているネットワークOS（NetWare）の関係で、通信プロトコルが標準的なTCP/IPではないことが、利用を躊躇する一因となっていました。

7月から稼動試験を始めた ERL（Electronic Reference Library）システムは、高性能 UNIX マシンの磁気ディスクにロードした MEDLINE（CD-ROM 版）のデータベースを、研究室等のクライアントマシンからより高速に検索できるものです。通信プロトコルとして TCP/IP をサポートしており、これまでの問題はクリアできます。クライアントとしては、Macintosh, DOS/V, および Windows 3.1, Windows 95が稼動する PC 98を予定しています。

本稼動は、各クライアントでの動作確認、具体的な運用方法の検討を経た後になります。

なお、これまでのパソコンサーバによる MEDLINE のネットワークサービスは、契約上の拘束により、ERL システムの本稼動後、1か月程度の猶予期間を経て休止する予定です。

### 夏季休業期の夜間開館時間延長試行（分館）

蔵本分館では学生夏季休業期（7/11～9/10）の7月および9月の平日を20時まで開館時間を延長する試行を行いました。8月については利用者数の減少、時間外閲覧要員の確保等の諸問題の為例年どおり17時で閉館しました。また、8月の土曜日に関り、上記理由で今年度は閉館しています。試行を実施するに当たり入館者数等の統計をとり次年度への参考資料にしたいと考えています。

### 自然科学系特別図書 Landolt Börnstein : Numerical data & functional relationships in science & technology（ランドルト＝ベルンシュタイン数値表）

文部省より平成7年度自然科学系特別図書購入費の配賦を受け、標記資料を購入（本館備付）しましたので、ご利用下さるようご案内します。

Landolt Börnstein は、物理、化学、天文、地球物理、工学にわたり高度に評価された世界的に最も信頼のおける広範囲な物性定数表です。

今回の購入により、既に所蔵しているものと併せほぼ全部門について揃いました。

### 新入生にすすめる100冊の本（本館）

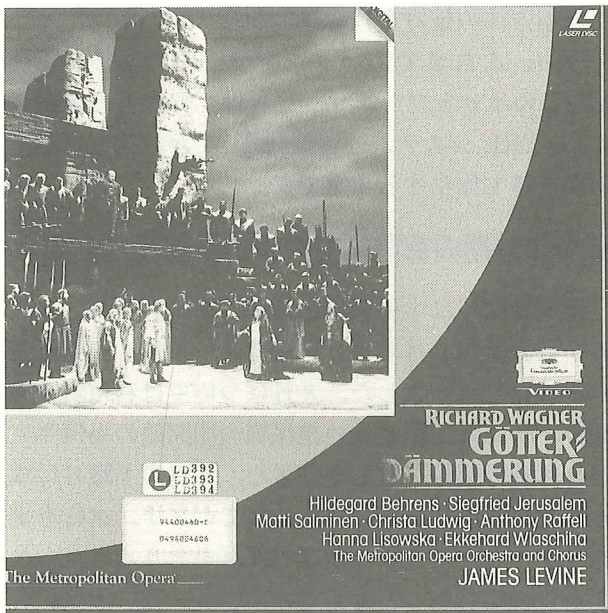
徳島大学生協同組合では、100名の教職員から推薦された図書の書評を「新入生にすすめる100冊の本」として小冊子にまとめ、発行しています。このうち、図書館に所蔵していない図書68冊を同生協のご好意により寄贈していただきましたので、大いにご利用下さい。



## Audio Visual おすすめの一本（本館）

## ワーグナーの楽劇『神々の黄昏』

総合科学部教授 石川 榮作



本学附属図書館（本館）所蔵のレーザー・ディスク（LD）の中から今回はワーグナーの楽劇『神々の黄昏』（1874年完成、1876年初演）をお薦めしたい。このLD（番号 392～394）は「すだち」52号ですでに紹介した『ジークフリート』の続編であり、1990年4月／5月メトロポリタン歌劇場においてライブ収録（レヴァイン指揮、シェンク演出）されたものである。共通教育や専門教育の授業でも何度か取り上げたことがあるので、ご存じの学生も多いことだろう。

そのあらすじをまず簡単に紹介しておくと、岩山でブリュンヒルデと結ばれたジークフリートは、彼女に指環を渡してまた新たな冒険を求めて旅に出る。辿り着いたのはライン河畔のギービヒ家の館。当主のグンターは邪悪な異父弟ハーゲンに操られて、ブリュンヒルデへの求婚に興味を示しているところであった。そこに到着のジークフリートは、ハーゲンの奸計で忘れ薬を飲まされ、たちまちブリュンヒルデのことを忘れて、目の前にいるグンターの妹グートルーネに夢中になってしまう。彼女との結婚の条件としてジークフリートは、隠れ頭巾の秘策でグンターに変装して岩山に行き、ブリュンヒルデを征服

したのち、彼女をグンターの妻として連れ帰る。ブリュンヒルデはやがてジークフリートの姿を見つけ、しかも彼の指に指環を認めると、自らが裏切られたことを悟る。ハーゲンは激しい嫉妬と屈辱の念に苦悩するブリュンヒルデを巧みに騙して、彼女からジークフリートの弱点を聞き出し、さっそく翌日狩猟の場でジークフリートを殺害する。ブリュンヒルデは真実を明らかにしたあと、ジークフリートの遺骸を焼く猛火の中に自ら飛び込んで殉死する。火はギービヒ家の館から天上のワルハラ城にも燃え移って、神々は滅び去る。

古代北欧のエッダ・サガを主な素材とし、中世ドイツの英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』をも一部利用した作品であるが、ここでは邪悪なハーゲンの策略がクローズアップされて、愛と権力の相剋が見事に描き出されている。指環はつまりブリュンヒルデにはジークフリートの愛の象徴であるが、ハーゲンにとっては権力の象徴であり、この指環をめぐる悲劇が展開してゆくのである。圧巻は何と言っても最終場面であろう。ブリュンヒルデが薪に火をつけるや否や、たちまち館は猛火に包まれ、天上のワルハラ城もろとも崩れ落ちる場面の凄さには、メトロポリタン・オペラならではの高度な舞台技術を感じずにはいられない。しかも猛火のあとは一転してラインの河底での展開となり、指環は呪いから清められてライン河の乙女たちの手に戻る。指環を始終つけ狙っていたハーゲンは、ラインの乙女たちに深みへと引き込まれてしまう。ハーゲンの「権力」は滅び去り、ジークフリートとブリュンヒルデの「死による愛」の勝利である。ワーグナーの本来の意図は、しかし、そのあとにある。神々はこうして滅び去るが、その廃墟の中からやがて「愛」が支配する人間の新しい世界が生まれてくることが暗示されているのであり、このLDの最終場面ではその本来の意図が象徴的に見事に演出されている。ワーグナーの原作に忠実に演出されている点で注目し得る楽劇であると言ってよいであろう。

## Audio Visual 利用のすすめ (分館)

蔵本地区は医学部、歯学部、薬学部、医療技術短大等のライフサイエンス系の部局が集中しているところ。

蔵本分館の蔵書の収集、構成も生命科学系が中心で、視聴覚 (Audio Visual) 資料も同様です。

視聴覚資料は、ビデオ (Uマチック、VHS)、カセットテープ、スライドなどを所蔵していますが、利用の大半は VHS です。平成7年度の利用状況は下記のとおりです。

教職員	23名	72本
学生	16名	40本
その他	5名	17本

また、VHS テープで利用の多かったものは以下のとおりです。

### 新版 目で見える医学の基礎 (VHS)

1. 細胞と組織 (29分)
2. 神経系—中枢神経 (29分)
3. 神経系—末梢神経 (30分)
4. 消火器系—消化管 (30分)
5. 消火器系—肝・胆・膵 (28分)

### JRIA ビデオシリーズ (VHS)

1. アイソトープとは (20分)
2. 人体への影響 (20分)
3. 安全取扱の基礎 (20分)
4. 安全取扱の実際 (23分)
5. 医療施設における安全取扱 (25分)

### 医学情報の達人 (VHS)

1. 生命を支える情報サービス (18分)
2. 医学研究のための文献の探し方 (20分)
3. 医学文献データベース (20分)
4. 誰にでもできる学会プレゼンテーション (17分)

### 国試ポリクリ・シミュレーション

1. 内科I 医学医療総論 (60分)
2. 内科II 医学総論 (100分)
3. 内科III 医学総論・各論 (80分)
4. 内科IV 医学各論 (90分)

最近視聴覚機器の普及が進んで各講座・研究室等にビデオ装置が備付けられており、図書館の視聴覚室の利用が減少しています。

今後、図書館では利用者の要望等を入れて視聴覚機器および資料の充実をしたいと考えています。

## 本学教官著作寄贈図書一覧 (平成8年4月～7月受入分)

下記の著作が寄贈されましたので、専用のコーナーに配架して、利用に供しています。寄贈者の方々に改めてお礼を申し上げます。

記

本館

著者名	書名	発行所	寄贈者
脇健 [ほか著]	新しい有機化学	三共出版	脇健
了義院日達上人撰述	朝廷前奏 閻浮第一立像釈迦佛縁起	萱間篤一	萱間篤一
萱間篤一校註	朝廷後奏 法華現安後善鈔	萱間篤一	萱間篤一
	了義院日達上人遺芳	達門会	萱間篤一
竹治貞夫編著	平島公方の「阿波退去日記」その他	竹治貞夫	竹治貞夫
竹治貞夫編	湯炳正教授との往復書簡並びに唱和	竹治貞夫	竹治貞夫
一條義博著	退官記念 一條義博教授論文集	総合科学部 数理学教室	一條義博

蔵本分館

著者名	書名	発行所	寄贈者
宮本博司	Wanderings in the forest of physiology.	第一生理学教室	第一生理学教室
実践栄養学教室	岸野泰雄教授退官記念徳島大学医学部 実践栄養学教室業績集	実践栄養学教室	実践栄養学教室



著者名	書名	発行所	寄贈者
松本圭蔵	三折肱	私家版	松本圭蔵
徳島大学	教育研究学内特別経費による 研究報告書 平成6年度	徳島大学	徳島大学
齋藤史郎編著	内科における症例の研究 —稀な症例を中心に—	内科学第一教室	内科学第一教室
内科学第一教室	齋藤史郎教授の最終講義 臨床内分泌学における40年	内科学第一教室	内科学第一教室
宮本博司 [ほか] 編著	人体生理学の基礎	医学出版社	第一生理学教室
高杉益充編	輸液療法 基礎から臨床まで	医薬ジャーナル社	高杉益充
Medical Economics	Physician's Desk Reference;1996	Medical Economics	高杉益充
医学部編	徳島大学医学部教育研究成果まとめ 1994-1995	徳島大学	医学部

図書館日誌

会 議

平成8年4月1日～7月31日

4月15日	第1回常三島地区運営委員会	7月8日	第3回運営委員会
4月16日	第1回蔵本分館運営委員会	7月8日	第3回常三島地区運営委員会
4月19日	第1回係長会議	7月8日	第1回常三島地区図書選定委員会
4月22日	第1回運営委員会	7月12日	第1回薬学部図書委員会
5月23日	第2回係長会議	7月15日	第1回医学部図書委員会
5月28日	第2回蔵本分館運営委員会	7月15日	第1回館報編集委員会
6月5日	第3回蔵本分館運営委員会	7月16日	第1回蔵本分館学生用図書選定委員会
6月5日	第2回常三島地区運営委員会	7月18日	第3回係長会議
6月7日	第2回運営委員会	7月25日	専用電子計算機システム技術審査委員会

人 事 往 来

発 令	官 職	氏 名	
平成8.5.31	情報サービス課分館情報サービス係事務補佐員	中川 真 吾	辞 職
平成8.6.1	〃	松本 優 子	採 用
平成8.7.1	〃	梅谷 泰 子	〃
〃	〃	百合野 美 香	〃

編集後記

他の大学図書館の中には、館報をWWWサーバにHTML形式で載せ、公開しているところがあります。本学では、大学の公式ホームページが今年度中に稼働します。この館報「すだち」も、この際、電子化してはどうだろうか、と思います。冊子体と並行して発行するのであれば、経費節減には繋がりません。逼迫している図書館財政を圧迫しないためには全面的移行が望ましいと思いますが…。いかがでしょうか。(Y. O.)

編集委員会：委員長・河野 清 委員・林, 姫野, 隅田, 滝本, 折原, 吉田  
 発行：徳島大学附属図書館  
 徳島市南常三島町2丁目1番地 徳島(0886)56-7584 内線(6111)  
 FAX 附属図書館(本館)(0886)55-9593 蔵本分館(0886)33-2950